

高校生活で養う課題意識・コミュニケーション力 これからの推薦・AO入試指導

生徒の志望理由書が似通っていると悩むことはないでしょうか。オリジナリティのある志望理由は、特別な経験がなければできないわけではありません。その生徒らしい志望理由のテーマを設定する力は、学校生活の中で問題を発見し、解決に向けて考える経験を重ねることで育まれます。

藤岡慎二

株式会社
Prima pinguino
代表取締役

第 8 回

高校生活でつける 「マイテーマ」を設定する力



ふじおか・しんじ ● 1975年生まれ慶應義塾大学大学院修了。数学や生物の大学受験対策を教える塾講師を経て、大学院でキャリア教育の重要性に気付き、研究を開始。小学生から社会人までを対象とした現場指導経験を有し、推薦・AO入試対策、社会人基礎力の指導や教材・プログラム開発を大手大学受験予備校や高校・大学で行う。島根県立隠岐島前高校をはじめとし、行政と協業し教育を通じた地方創生に取り組み、現在、北海道から沖縄までの高校魅力化プロジェクトに参画、高校連携型の公営塾を運営。

推薦・AO入試では特に志望理由書において、自らが取り組むべき問題・課題つまりマイテーマを発見することが求められます。大学で学ぶうえで、目的意識や問題意識を明確にしなければ学部はおろか、大学すら選択できません。なぜなら、学生もつ問題意識を、学問を通じて探求したり、明らかにしながら、その過程で学ぶ場が大学だからです。

マイテーマの設定は特別なこと、つまりは特別な活動をしていなければ、できない行為と思われがちですが、そうではありません。高校生活から発見できますし、問題発見能力を磨くこともできます。

推薦・AO入試の中で求められる マイテーマの設定

慶應義塾大学総合政策学部の入学者受入基準(アドミッションポリシー)には、以下のような記述があります。「総合政策学部は「実践知」を理

念とし、「問題発見・解決」に拘る学生を求めます。問題を発見・分析し、解決の処方箋を作り実行するプロセスを主体的に体験し、社会で現実問題の解決に活躍する事を期待します。(以下、略)」

東京大学のアドミッションポリシーにも「(前略)自らの問題意識を掘り下げて追究するための深い洞察力を真剣に獲得しようとする人を東京大学は歓迎します」とあるように、双方に問題・課題からマイテーマを設定する力が重視されていると言えるでしょう。

単なる「選択」に陥りがちな 問題・課題設定

生徒に「あなたなりのテーマを設定してきなさい」と言うと、大体において生徒の問題・課題が似通ってきます。昨年度と今年度の生徒の志望理由書のテーマを見ると、貧困が多く、猫も杓子も「貧困が問題だ」の大会

唱です。その前は自己肯定感、さらに2011年の震災の年はメディアが問題となっていました。時代の中を生きている生徒たちにとって、時代が変われば気になることが変わるのには理解できます。しかし、取り組むべき問題・課題から進路先まで似通るのはいいかなものでしょう。

原因は問題・課題を 発見する力の欠如

問題・課題を設定するときに陥りがちなことは、生徒が安易に、周囲にある問題・課題をあたかも自らのモノとして捉えることと言えるでしょう。これは問題・課題の発見ではなく、単なる問題・課題の選択能力であり、大学が望む能力ではありません。新聞を読み、記事を指差して、「これが問題だ」と主張する能力を大学が求めるとは思えませんよね。必要なのは、その生徒にとって取り組む必然性のある「マイテーマ」の設定なのです。

問題・課題が似通ってしまう原因は、生徒の問題・課題発見能力にあります。生徒自身が違和感を覚えた事態に関して、状況を把握し、情報を整理したうえで、問題や課題を発見する力が不足しているのです。不足している理由は、生徒が問題・課題の発見方法を学ぶ機会の少なさでしょう。まずは問題・課題を発見する方法について考えましょう。

問題とはあるべき姿と現状のギャップです。例えば、「貧困」は状態であり、問題ではありません。貧困という状態によって引き起こされる現状と、貧困という状態が解消されたあるべき姿（ビジョン）の間にこそ、解決すべき

問題が存在します。問題を把握してから、問題が起きている原因を深掘りし、そこにある課題を明確にするというプロセスが大切なのです。同じ貧困であっても、生徒それぞれに取り組む理由があるはずで、自分が考える理想状態とは何か、何が一番の課題なのか、具体的に取組むたいのは何か。情報を集めていくうちに、違う問題に気付くかもしれません。

また、解決にいたるアプローチ方法を考えるうちに、必要な質問が見えてくるかもしれません。どこまで深く考え、明確にできるか。それが、単に問題を選んだだけか、「マイテーマ」と言えるものまでできるかの違いとなるでしょう。

問題・課題を深める能力は 授業や課外活動で身に付ける

問題・課題を発見し、深く掘り下げる能力は高校生活で十分に身に付きません。身に付けるタイミングは、授業と課外活動。授業においては課題を発見し、解決するような学習は最適な機会です。解決に向けた探究活動のなかで、理想状態を考え、情報を集め、原因を追究し、段階を踏んだ試行のプロセスを体験できるからです。

インターシップや就業体験も工

夫次第では有効ですが、体験だけで終わらせず、仕事における課題を生徒に突きつけてはどうでしょうか。生徒に仕事における問題・課題は何か、いかに解決するのかを考えさせ、発表させ、大人からフィードバックを得るだけでも意味があります。

次に、部活や委員会活動などの課外活動で身に付けるタイミングに注目しましょう。課外活動は問題・課題の宝庫です。なぜ試合で勝てないのか、部員が主体的にならないのか。委員会活動でも、文化祭に多くの人に来てもうらにはどうすればよいか、生徒の登下校のマナーを良くするにはどうするかなど、問題・課題を発見する能力を鍛える機会は多分にあります。先生方が問題を解決するのではなく、生徒たちに問題・課題を明確にさせ、解決に向かわせるナビゲーターとなることが重要です。

生徒なりの価値観・信念・信条からマイテーマを見つける

最近の生徒のマイテーマの探し方を見ていて、気になることがあります。大学に受かりそうなテーマを挙げ、経験や体験、エピソードを強引に作る方法です。例えば、受かりそうなテーマが貧困だと決めた生徒は、貧困に係る体験を自分から作ります。そ

こでの体験から貧困というテーマに行き着いたように、志望理由で書きたいからでしょう。場合によっては体験を作るために高校生団体を結成するなどのアリバイ作りや、エピソードを捏造する場合があります。

その行動の動機に信念が感じられない場合、大学に「生徒なりのテーマ」とは認められないでしょう。なぜなら、「たまたま」出会った経験や体験が志望理由のテーマとなるのは不自然だからです。大切なのは価値観・信念・信条に基づいた行動や思考です。

価値観・信念・信条とは座右の銘など生徒が信じている、心の拠り所になっている言葉です。価値観・信念・信条から志望理由のテーマが導かれた時にこそ、生徒なりのマイテーマになると信じています。人は思っていないことを考えたり、行動したりできます（もちろん葛藤を感じながら、です）。しかし、自らの価値観・信念・信条に嘘をつくことは至難の技でしょう。自身のアイデンティティに関わるからです。

生徒の価値観・信念・信条は、生徒の思考や行動により証明されます。つまり、価値観・信念・信条、それらに基づいた思考や行動、経験・体験からこそ、生徒なりのテーマが生まれると思えます。

